

## 豊明希望チャペル礼拝

2022/11/20

ヨハネの福音書 13:1~11

「彼らを極みまで愛された」

ヨハネの福音書から教えられている私達は、前回 12 章までのところを終え、今日 13 章から、まさに受難週の出来事を記録している箇所から教えられていくことになります。今日の 13 章から 21 章までが、いわゆる受難週の記録で、実に、ヨハネの福音書の半分がいわば受難週の記録なのです。

この長い受難の週の記録をヨハネの福音書は記録するにあたり、今日の箇所は最初の箇所で、こうまとめてくれているのです。

おそらくこんな思いだったように想像するのです。ちなみに、ヨハネの福音書は、他の福音書の中でもっとも後に書かれた書と考えられています。また、ヨハネが高齢となって、人生の最後に書かれたのではないかと想像されているわけですが・・・「私は、このイエス様の受難の週をどのように報告したらいいか考えていました。とくに、マルコの福音書、ルカの福音書、マタイの福音書とすでにみなさんは手にされているわけですから、わざわざあらたにイエス様の生涯を描く必要があるかと考えました。しかし、やはり、イエス様の目撃者の一人として書く必要があると考えたのです。そして、熟考に熟考を重ね、イエス様の最後の一週間は何かであったのかを考えて、一言で言えることがわかりました。それは、イエス様は十字架を含めて、十字架と復活を通して、その最後の一週間で、弟子達の私たちを愛し尽くされたと言うことです。そして、その愛は、私たちをはじめとした、すべての罪人への神の愛だったのだと思います。そのことに気づいたとき、私も、福音書としての記録を書いても意味があるのではないかと考えたのです。それで、最後の一週間の記録を記すにあたり、私の考えをあらためて述べます。」

すなわち、

「13:1 さて、過越の祭りの前のこと、イエスは、この世を去って父のみもとに行く、ご自分の時が来たことを知っておられた。そして、世にいるご自分の者たちを愛してきたイエスは、彼らを最後まで愛された。」

この「最後まで」ということばは、皆さんの新改訳聖書の欄外にはこう書いてありますね。こういうふうにも訳せると。すなわち、「極みまで」愛されたと。

「それが、私が、イエス様の最後の週の記録についてそれを記す、大事な視点であります。」

と・・・ちょっとヨハネの気持ちを代弁してみましたが、冒頭まとめとして、そういう書き方がしてあるということです。

また、内容を見ていってもそのことが言えます。

この 13 章以下に出てくる「愛」という言葉を数えまして、12 章までに 6 回出てくるのに対して、この 13 章から、イエス様が捕らえられる 17 章までの弟子達

との関わりを描いたわずか4章の中だけで、実に31回も愛という言葉が出てくるのです。一般的には、この13章以下は、「受難の書」とも言われる一つのまとまりなのですが、いや、受難の話、あるいは、受難の書と言っていいのです。こういう言い方が正確でしょう。受難の書が、同時に「愛の書」であるということです。おいおい触れていくこととなりますが、どうして、イエス様にとって一番苦しいときが、愛の書であり、イエス様にとってもっとも悲惨な時、他者を愛するというどころではない自分のことで精一杯であるはずのところ受難の書が、愛の書なのだと言うことです。

その秘密といいますか、その意味を、ジックリと最後の章までゆっくりと確認していけたらと思います。ゆっくり確認しながら、十字架を思いながら、感謝とと共に、イエス様の愛で心が満たされていけるようにと願います。

さて、今一度。いわばこの愛の書は、このように始まるのであります。

「13:1 さて、過越の祭りの前のこと、イエスは、この世を去って父のみもとに行く、ご自分の時が来たことを知っておられた。そして、世にいるご自分の者たちを愛してきたイエスは、彼らを最後まで愛された。」

13:2の最初も確認しましょう。13:2「夕食の間のことであった。・・・」

最後の晩餐の場面ですね。また、人類最初の聖餐式となった箇所であるというわけです。すなわち、この食事の時、聖餐式の時に、洗足が行われたということでもあります。細かく言うと、実は、この洗足の場面は、ヨハネの福音書のみにも描かれています。マタイもマルコも、ルカにも、聖餐式の場面で、この洗足の記載はありません。逆に、ヨハネでは、もちろん最後の晩餐は描かれますが、他の福音書に見るような、何か、後の時代の聖餐式の根拠となるような書き方、「これが私のからだ・・・」みたいな制定の言葉がないです。その代わりに？・・・ヨハネは、この洗足の場面を、特別に挿入した感じがあります。あるいは、ヨハネの聖餐式理解があるのかもしれませんが。すなわち、聖餐の重要な意味、その中心は「交わり」だということ。一つの交わりは、イエス様との交わり、もう一つの交わりは、弟子達の愛の交わりです。弟子達の一致、そこにある謙遜に互いに仕えあること、愛し合うこと、聖餐式の中心はそこにこそあると。

ちょっと先走りしましたね・・・もう少しゆっくりと見ていきましょう。

まず、「さて、過越の祭りの前（の日）のこと」それは、十字架の処刑の前の日となります。余計な事かも知れませんが、他の福音書と比較して、その日程を確認しておきます。

**共観福音書(最後の晩餐:ニサン(春から始まる暦の1月)の月の14日夜、十字架:ニサンの月の15日、復活:ニサンの月の17日)**

**ヨハネ福音書(最後の晩餐:ニサンの月の13日夜、十字架:ニサンの月の14日、復活:ニサンの月の16日)**

ヨハネの解釈は、一日ずれていますが、いずにしても、イエス様の死の前日ということでもあります。いわゆる人災最後の日です。私たちなら、人生最後の日は何をするでしょうか。その人の一番関心の高いこと、一番したい事をするのです。

それは、その人の今まで生きてきた動機がそこに現れるのです。思いっきり美味しいものが食べたいと思う人は、美味しいものを食べるために生きてきたのでしょうか？家族と楽しい時を最後に過ごす、家族のために生きてきたのですね。イエス様は。

「ご自分の時が来たことを知っておられた。そして、世にいるご自分の者たちを愛してきたイエスは、彼らを最後まで愛された。」というのです。

「その愛を極限まで示された」のです。イエス様、神様の一番の思いは愛。私達を愛し尽くすことであることがわかります。

ただ、このイエス様のあふれんばかりの愛の行為は、ある意味、不穏な空気の中で進められました。すなわち、人の罪、ユダの恐るべき罪のことから書き始めたのです。

「13:2 夕食の間のこと、悪魔はすでにシモンの子イスカリオテのユダの心に、イエスを裏切ろうという思いを入れていた。」

「13:11 イエスはご自分を裏切る者を知っておられた・・・」とあります。

ここで思うのは、神が私達のことを極みまで愛していても、私達がそれにふさわしくない存在であることです。というのは、ユダばかりではなく、この後、ペテロの行状によって、私達は、いかにふさわしくないかが、一層明らかになっていくからです。

5節までお読みします。

「13:3 イエスは、父が万物をご自分の手に委ねてくださったこと、またご自分が神から出て、神に帰ろうとしていることを知っておられた。13:4 イエスは夕食の席から立ち上がって、上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。13:5 それから、たらいに水を入れて、弟子たちの足を洗い、腰にまとっていた手ぬぐいでふき始められた。」

足を洗うのは、奴隷やしもべの仕事でした。

また、もう少し、ここで、起きていたことについて、他の福音書を読むと、弟子達が、「誰が弟子達の中で偉いのか」とケンケンがくがく、弟子達が険悪なムードになっていたときであったと記録されています。再確認しますが、そんな中で、イエスが「その愛を残るところなく示された」という事なのです。

イエス様が足を洗うのは、まさにイエス様の弟子達への、この赦しの愛、そして、極限の愛を示すためでした。どういうことでしょうか。キリスト教の病院ではありませんが、ある病院では、このイエス様にならって、やはり洗足、足を洗うことをするそうです。患者さんが退院するときに、院長が自ら率先して患者さんの足を洗って送り出すのです。

(徳洲新聞 2006年(平成18年)1/16 NO.501 堀内芳夫(長崎北徳洲会病院院長))「退院される患者さんの足を洗うようになって、1年以上が経ちました。当初は、その人の人生の苦労や闘病の苦労をねぎらうつもりで始めました。まず、自分の手を洗います。専用の洗面器に、やや熱めの湯を入れて準備。看護実習で教わったように、足の末梢まつしょうから足指、指間、足底、足背、足関節と順に素手でマッサ

一ジしていきます。揉んだりもさすったりもして、垢もゆっくり落とします。それを何度か繰り返す。最後に乾いたガーゼやタオルでこすらずに、水気だけを吸い取ります。そのうち「足に表情があるんだな」と感じるようになりました。その人の人生が刻み込まれていると、感じるのです。昔の苦労話に花が咲くこともよくあります。・・イエス様も弟子たちの足を洗って弟子たちに「私<sup>あか</sup>があなたがたにしたように、あなたがたも（信者たちに）するように」と、模範を示されたということです。足を洗ってあげているという感覚から、いつの間にか、足を洗わせてもらっていると思う自分に気が付きました。・・患者さんの中には、涙される方も多くおられます。何か苦労があったのだらうなど、こちらも目頭が熱くなります。認知症の方が、ひと時正気になられたように感じることもありました。・・」

イエス様は、弟子達の足を洗いながら、ペテロの性格、ヨハネの性格、そして、思い出を一つ一つ確かめるように、罪も、その一つ一つを洗い落とすが如く、足を洗われたのかも知れません。また、3年間の長旅をした足、一本一本をいつくしむように。私はこれから十字架に付くが、あなた方は、これからも、この足で、互いに支え合い、仕えあい、しっかりと歩いていくのだよと、励ますようにであるのかもしれない。続きの部分は、ペテロの話になります。

ペテロは、自分の番に回ってきたとき、「主よ。あなたが、私の足を洗ってくださるのですか。」と言います。最初は断りますが、それでは、私とあなたとの関係は無くなると言われて、じゃあ、全身洗って欲しいと願います。いや、足だけで十分とイエス様は言われる。ある意味で、微笑ましいやりとりです。

しかし、これは、ペテロがイエス様を裏切る、悲しい微笑ましさとなります。この出来事を記憶しながら、その話しは次回以降に教えられましょう。

今日は終わりたいと思います。

山室軍平牧師が、明治の初めに衆議院議長を務めた、片岡健吉というクリスチャン（日本キリスト教団高知教会）が、信仰を持ったときの事についてこう言っています。

「片岡健吉が政治上の問題にて、石川島の監獄に投ぜられた時、一旦彼は便所の掃除を命じられて不満に耐えず、申し訳程度の仕事をして、監房に帰り、読みさしの新約聖書を開くと、ヨハネ 13 章、イエス様が弟子達の足を洗いたもう記事に出会い、「彼は・・イエス様さえもなお、弟子の足を洗いたもうというなら、私の便所の掃除くらい何であろう。私はむしろ残りの生涯全部をあげて、日本国民の汚れた足を洗うために働くべきではないか。」と、彼は、それより志をたててキリストを信じ、最後まで真実を尽くして国家に奉仕したのであった。」と紹介します。

この週、洗足のキリストを下に見ながら、感涙のうちに、私たちも同じく、洗足の歩み、愛の生き方を生きる者としてここから出ていきたいと思います。